

陸水域での体験活動を伴う環境教育の実施について

— 酒田市の小学校における活動の実施度と各小学校が立地する地域特性との関係 —

歌岡 大祐

私たち人間の多様で安定した生活は、生態系サービスと呼ばれる、自然界からの恩恵が基盤にあることで成立している。この生態系サービスは、多様な生物が生きるために関わり合うことで生まれる生態系の機能の副産物であり、生物多様性が保全されなければ維持することはできない。これからも私たち人間が自然環境と共生し、生態系サービスの恩恵を受け取るためには、自然環境について正しく理解し、自然環境の保全に努めながら、社会活動を行う必要がある。そのためにも、自然環境について学習する機会「環境教育」の実施は不可欠であると言える。

本研究の目的は、「酒田市内の小学校における陸水域(河川・水田・水路・湖沼・池・ため池)での体験活動を取り入れた環境教育活動」の取り組み状況を明らかにすることである。酒田市の小学校計 21 校にアンケート調査を実施し、実施状況を調査した。結果は、学校単位では 21 校中 20 校で調査対象に該当する環境教育活動が実施されていた。一方で、学級単位での実施度は 50%にとどまり、学級や学年によって活動実施の有無に差があることが明らかになった。最も実施度が高い学年は 4 年生だった。陸水域に該当する水辺環境の中で、河川が最も多く活動場所として選択されていた(全体の 43%)。活動の計画・実施を困難にする要因としては、「児童の安全管理上の問題」が最も回答数が高く、回答数が高い他の選択項目も、活動の際の児童の安全確保が間接的に影響すると考えられるものが選択されていた。

各小学校の実施度と、学校が立地する場所の周辺環境を地理情報ソフトで解析した結果を照合した結果、学校周辺の環境による実施度への影響は見られなかった。また、各小学校と実際に選択された活動場所との距離を算出した結果、平均 7.7km と徒歩圏内(1km と想定)の外側に移動し、活動を実施している学校が多いという結果が示された。